

ソルフェージュスクール創立 55 周年記念演奏会

ソルフェージュスクール新聞

秋冬号

発行 2017年3月15日
 編集責任者 田中純子
 豊島区目白 4-23-10
 Tel 03-3953-8517

(公財)ソルフェージュスクール



亀井由紀子先生

一月二十九日、ソルフェージュスクール創立五十五周年記念演奏会に出演させて頂いたために上野文化会館に向かう車中、天気の良い日曜日の午後でもあり、多くの家族連れや観光客が上野公園で賑わっているのが見えました。ここ数年間に私の所属するサンフランシスコシンフォニーの公演で上野文化会館に数回来りましたが、昼間に訪れるのは久しぶりです。急に同じ公園内にある国立美術館、東京芸術大学内の演奏堂など思い出し、また半世紀前に渡米する前に聴いた多くの歴史的な演奏を思い出し、まさに芸術の森の中に居る感覚を覚えました。コンサートには沢山の方々が来場され活気ある暖か

自然で大らか 息の合うアンサンブル

い雰囲気の中、水野紀子さんと共演させて頂いたモーツァルトのソナタをどうやら無事に終え、ホッとしました。引き続き室内合奏団のストラップ舞曲とサウンド・オブ・ミュージックを聴かせていただきました。それぞれ、とてもソルフェージュスクールらしい演出であり演奏でした。ソルフェージュスクールらしい！と感じた後、何がそうなのだろう？とずーっと考えています。言葉でははつきり言えないかも知れない自然さ、大らかさ、真剣だけれど楽しい、高度だけれど素朴、硬くないけれど芯がある、個性が出て全体のアンサンブルが息が合う。そして、お客様の肩のこらない応援の暖かさ。これが、恩師大村多喜子先生はじめ素晴らしい創立時からのお仲間先生方が築かれたもの！五十五年前に子供だった私が今確かに実感させていた、ソルフェージュスクールのこれまでの成果だと思います。コ

ンサートの後、広々としたロビーで多くの方から異口同音に、素晴らしい会だったとお言葉を聴きました。ヴァイオリンを凄く上手く弾く子が合唱に入って歌っている。専攻の学生さんがヴァイオリンを弾いて参加している。先生も生徒さんも、父兄の方も子供や孫と一緒に弾いたり、歌っている。

この音楽コミュニケーションは素晴らしい！

私自身アメリカで若い生徒さん達を教えていて、私がソルフェージュスクールで受けた様々な室内楽や合奏の体験を毎週させてあげられたら、と想う度、その想いを実際に形として表して下さった先生方の情熱と実行力に感謝の気持ちで一杯です。

これまでの実績を土台として、現代に生きる人々に寄り添った、音楽を介しての素晴らしい大切なコミュニケーションとしてのソルフェージュスクールの健全な活動をお祈りして。

亀井由紀子

ソルフェージュスクール第一期生
 サンフランシスコ交響楽団ヴァイオリン奏者

サウンド・オブ・ミュージック

みんなノリノリ 楽しんだ！！

とてもよいステージだったと思います。限られた練習時間しかない中で、外国語の歌詞を小さな子どもたちも視力記憶力の薄らいだオジサンたちも、よくぞ歌い切ったものです。

なによりスゴいなあと思ったのは、ただ歌っただけではなく、みんながノリノリで表現することを楽しんでたこと、そしてそれが聴衆にも伝わった(と思います)ことです。

難しく見える現代曲など、猛練習をして譜面に忠実に演奏すればそれだけでなんとかなるんです。反対に、サウンド・オブ・ミュージックのような誰もが知っている愛唱歌を「聴かせる」ほうが音楽性が要求され実は至難です。恐るべし、ソルフェージュスクール。

真面目系 坂本桂一
 コーラス・リコーダー生徒

ワシは、「音楽する」ことをこれほど満喫した本番は生まれて経験がないのである。

ヤマザキ先生の笛にポーっとなって歌うのを忘れたり、いろいろヤラカシたが、そんなことはどーでもいいのだ。

植木職人のワシが言うのもなんだが、世の中には完璧をめざして、ピシッと刈り揃えた盆栽みたいな演奏もあって、それはそれでスゴイけど、何かつまらないのだ。「感心」と「感動」は違うのである。

あの日、文化の小ホールは、表現する喜び、大人から子供まで全員が心を合わせて音楽を作る感動に溢れていたのではないかな。なのであの晩ワシは泥酔したのである。It will be OK.——これでもいいのだ。



バカボンのパパ風 坂本桂一

東京文化会館で演奏すると言いつつこと

上田耕二

音楽会での楽しみは、心地良い音楽とそれをそっと包んでくれる素敵な空間のような気がします。

心地良い音楽は、そう思えそうな音楽会を選んで聴きに行けばよいのですが、そこに心地良い空間があるとは限らないのが、難しいところです。

上野の東京文化会館は、音楽会さえ好みのものを選べば、期待どおりの時間が約束されている空間です。

何故そのような空間なのかと考えると、一つはオーディトリアムの内部の空間の雰囲気。そしてもう一つは、広く気持ちの良いホワイエ(※1)にあるので

はないかと思えます。

音楽ホールなので、第一に考慮されるのは当然音響と言いつつことになり。このホールの当初の音響設計はNHK技研によるものですが、設計者である前川國男は、科学的な音響設計を、ヒューマンな形に表現できるよう、ひたすら心を砕いたようです(※2)。

ある雑誌の対談で、著名な建築家内藤廣氏と音響設計(改修)担当の永田穂氏が面白いやり取りをしています。

内藤 小ホールの方の壁面はすごく凸凹でゴツゴツしていますね。

永田 あれはコンクリートで、流政之さんのレリーフなんです。文化会館にはボードの壁はないんです。

内藤 あの壁は音響的にはどうなんですか。

永田 天井と壁で独特の反射音が生まれます。ただ、何ていいますか上から見ると四角形のコーナーをステージに使うやり方は、今の音響の教科書の教えとは矛盾しているんです。反音響学的なんですよ。だけど僕は小ホールの音が好きですね。

内藤 良い空間ですよね。

永田 空間的にも良いし、音的にも。

内藤 音的にも良いですか。

永田 良いですよ。僕は好きです。今、カザルスホールとかいろいろ響くホー

ルが出来ていますけど、文化会館の小ホールは他のホールでは聴けない独特の響きがあるんですよ。

内藤・・・舞台の後ろのところに屏風みたいなものがあるでしょう。あれも面白いですね。

永田 舞台の音を拡散するための装置で「登り屏風」。あれも流さんのデザインで、ケヤキの木組みなんですよ。(※3)

小ホール(六四九席)の内部は、コンクリート打ち放しの壁の質感と、流政之(※4)による彫刻(レリーフ)が、適度に音楽に接する緊張感を高めてくれる。そしてもうひとつ、小ホールといえばステージの銀の屏風、五十余年、変わらず音楽家のバックになって、演奏家と聴衆を見守っています。

建築は市民のために

東京文化会館を設計した前川國男は、向かい合う国立西洋美術館(二〇一六年世界遺産登録)の設計者ル・コルビュジエに師事した建築家です。

東京帝国大学の建築学科を卒業し、その日のうちに、シベリア鉄道経由でフランスに向かい、二年間コルビュジエのもとで設計を学びました。渡仏は一九二八年、日本では戦争の暗雲がただよい始めている頃でしたが、パリではまだ市民社会の自由な雰囲気があったようです。パリ滞在中に自由な市民社会に共感を覚え、「建築は市民のためにある」と言う考えが前川國男の設計思想を支えることになったようです。

ホールを訪れた市民が自由につどえる空間、そんな考えが、他のホール建築では余り見ることの出来ない、広々とした



東京文化会館小ホール内部(2017年1月14日)リハーサル風景

心地よいホワイエを生む原動力になったと考えられます。

このパリ時代には、クラシックの音楽会にも度々足を運んでいたようです。フォーレのレクイエムを口ずさむような、音楽の造詣が深い建築家でもあります。東京文化会館が建てられて五十六年、半世紀と言う時を経た今でも、国内でも光り輝いているホールと言えるのではないのでしょうか。

建築の品格

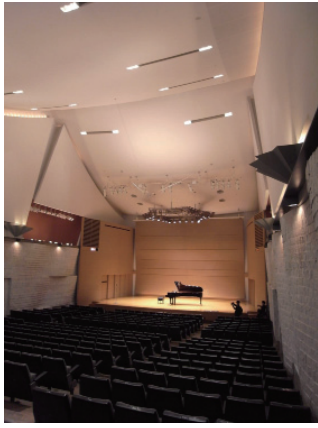
東京文化会館は、けっして贅を尽くした建物ではありません。「簡素にして品格あり」と言う、ソルフェージュスクールの設計者である吉村順三の設計スタイルにも通じるような気がします。

吉村順三は五十年前に、当時の「権威

ある建築家十人」の中から選ばれ、宮内庁からの委嘱で皇居新宮殿を設計（基本設計）しました。そのような建築家の設計したソルフェージュスクールの建物、その空間で音楽に接することが出来るのは、素晴らしいことだと思います。日常的に使用されているホールは、コストを抑えながら、シンプルで気品のある雰囲気を出しているのではないのでしょうか。

時を経て輝きつづける建築

東京には多くのホールが存在しますが、五〇〇席程度のホールとして、建築・音響の評価の高かった、カザルスホール（磯崎新設計・五一一席・日本大学）、津田ホール（横文彦設計・四九〇席・津田塾大学）が開鎖されていることは、とても残念なことです（この二つのホールはいつ解体されるかわからない状況です）。そのような中で、ますます東京文化会館小ホールの存在が際立っています。



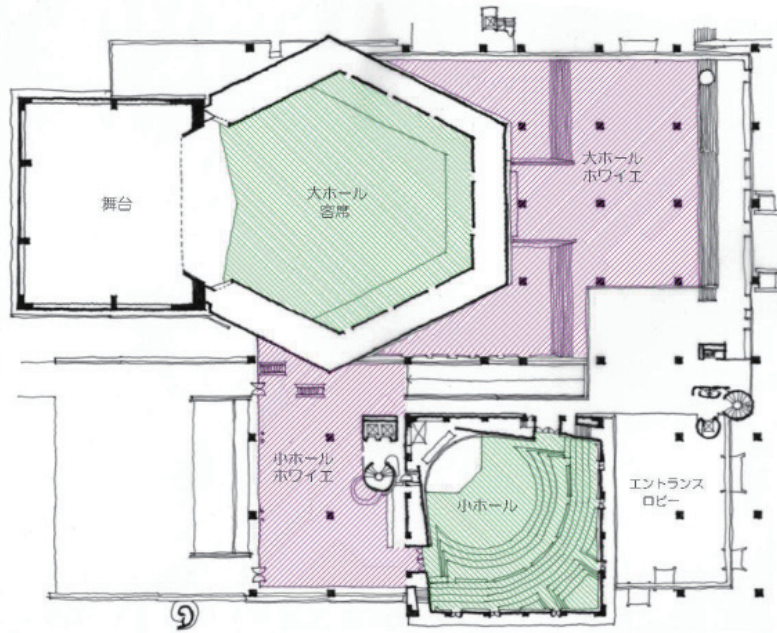
津田ホール 上田耕二撮影

前川國男や吉村順三などに代表されるモダニズム建築は、東京駅のような装飾をまとった洋式建築とは違い、市民にとって分かりやすい建築ではありません。そのため近年、歴史上有意義な近代建築の解体・再開発が後をたちません。音楽は、演奏する人、それを聴くこと

を望む人がいる限り、生き続けますが、建築は一度壊してしまふと、二度と同じ建物を造りなおすことは出来ません。

コルビュジエの西洋美術館が世界遺産に登録されたことを受け、日本各地に点在する前川國男の建築を再評価する動きとして、国交省観光庁の支援する「近代建築ツーリズム」が弘前市や東京都など八自治体で結成されました。勿論東京文化会館もその中に含まれています。

ソルフェージュスクールが設立されたのが一九六一年、東京文化会館が開館したのも一九六一年です。創立五十五周年記念音楽会が、東京文化会館小ホールで開催されたことは、偶



ホール： 大ホール 小ホール
ホワイエ： 大ホール 小ホール
東京文化会館 2F 平面図 / 上田耕二作図

然とも言えないものが有るように思えます。

日本の近代建築の代表作、東京文化会館がこれからも市民から愛され続けられるよう、人々が共に幸せな時を過ごす空間であり続けるよう、願ってやみません。

ソルフェージュスクールの次の記念音楽会を、このホールで聴けることを楽しみにしています。

※1：劇場やホールなどの施設で、出入り口とホール客席部分の間にある広間。開演前や休憩時間の飲談や休憩などに用いる。開演前や休憩時間に簡単な飲食が出来る施設が付属する場合が多い。

※2：小ホールは当初は国際会議場としても使用できるよう設計されていたので、残響時間をのばす等、一九九九年に永田音響設計により音楽専用ホールとして改修されているようです（約一年かけて文化会館全体を大改修、一九九九年にリニューアルオープン）。

※3：INAX REPORT 一六三号より（二〇〇五年六月発行）

※4：国際の評価の高い彫刻家。抽象的な作品が多いが、東京の大手町にある「おさわり大黒」と言ったやや具象的な作品もある。

うた・ことば

建築家、一九四八年、東京都世田谷区出身。ユー・デザインファクトリー一級建築士事務所主宰。日本建築家協会会員。



ソルフェージュスクール 3F ホール 門馬金昭撮影

55周年記念公演の 舞台裏から…

加藤光俊



奏者を待つ舞台の椅子

で行われた五十周年記念公演でした。二〇一三年にはJTホールでの大村先生の追悼公演にも参加させて頂きました。仕事柄都内のクラシック専用ホールのスタッフとは既知の間柄。ひと声掛けると便宜を図ってくれるのでは、という図々しいこちらの勝手な思いで、何とか無事に終わらせて来ました。

昨年の二月頃でしょうか、吉村隆子先生から『五十五年は東京文化会館小ホールが確保できました。また舞台お願いね!』と軽い一言。正直驚きました。だつてこの小ホールは抽選などではなく、諸々審査もあり、特に日曜日など某芸術大学の教授陣や常連の団体でも簡単に確保できるものではないのです。それが…一月とはいえ日曜日。何ということでしょう。まさに

「公益財団法人ソルフエージスクール」
恐るべし!

五十五年公演で「サウンド・オブ・ミュージック」を演奏する予定と聞き、六月の発表会を見に行き、ついにお手伝いもさせてもらうことに。舞台上乗った合唱の人数にちよつと驚く。約五十人…それに弦楽合奏団にピアノ。そしてその時に「一月の記念公演では、合唱団はまだ増やすし、オケも弦楽だけでなく管楽器も入れるから。」と初めて聞きました。

整理しておきます。発表会を行った日本橋公会堂の舞台は間口十二m奥行十一m（反響版を立てて少し小さくなりますが）。東京文化会館小ホールは、間口四・五m奥行五・四m。そう、とても狭いのです。

『乗る?』『無理でしょう!』『プロگرام変えられない?』『無理でしょう!』『自問自答する心の叫び!』

文化会館に僕と古い付き合ひになるスタッフがいることを思い出し、急遽「お昼でも久々に食べないか?」と誘い出して状況を説明する。彼はデザートを前に僕の書いた舞台図をじつと見て無言!デザートを無言のまま一気に食べて口を開く。「加藤さん、この舞台上

その合唱の人数乗せるの?…無理。弦楽オケも乗るんですよ?そもそも加藤さんの描いたピアノ、実際そんなに小さくないから。縮尺違ってるし。」

彼から合唱台がぎつちりと組み込まれた、縮尺の正しい舞台図が、「これが最大に乗せられるパターン。あとは実際に現場でやるしかないですね!」というコメントと共に送られてきました。

「図面上は無理。でも一人一人がちよつとだけ無理をして協力してくれば、乗せることができるかも。幸いにしてリハーサルがある。そこで何とかやってみよう!」

公演の二週間前、舞台図面通りに組まれた舞台でリハーサルが行われました。舞台を見て困惑の表情をしていたみんなの顔は忘れません。でもリハーサルが進むうちにみんなの表情が変わって行きました。二週間後ここで素敵な本番を迎えるんだ!この気持ち芽生えて来たようです。そして公演当日。合唱台の高さと広さを変え、ピアノの位置も変わりました。舞台上乗る人数も増えました。特にオケパートは、リハの時よりも狭く弾きにくい状況でした。でもリハーサルをやっていたから、みんなそれぞれが、その全てに迅速に対応できました。二週間前のリハーサルをやっていたら、多分合唱団の何人かは舞台から落ちて歌っていたでしょうし、江原先生は客席の最前列で指揮をしていたかもしれません。楽しそうに歌う子供達の顔を客席から見ることができなかつたです。

今回の公演で合唱団は六十三名、オケ十六名+指揮。つまり八十名が一人も落ちることなく乗りました。そして本当に一体となった演奏をすることができました。ホールの担当者、こんな人数が一度に乗った公演、五十年以上の長い歴史のあるホールでも初めてかも、とおっしゃっていました。

トランプ・ゲームで「大貧民」というものがあります。僕にとつて「ソルフエージスクール」大貧民」なのです。二十五年余り前、結婚したばかりの僕が家内に連れて来られたのが、目白のピンクの建物。ちよつと暗い階段を上っていくと、そこには少し天井の低い、でも外見からは想像のできなかった素敵なホール。素晴らしい!と思つた瞬間に聞こえてきた言葉が、「アッ!モミちゃん(家内の旧姓の呼び名)、来たね。今から始めるから一緒にやろうよ。大貧民!」グランドピアノのとなり車座になっている、数人の男女。数分後には挨拶もそこそこ、我々二人も彼らと共に大貧民に興じていました。

そう、これが僕のソルフエージスクールとの出会いでした。そこで一緒にトランプをした人達が、今回五十五年記念演奏会で指揮をした江原陽子先生であり、そのオケのコンマス・小倉康朗君や後援会の役員の大塚典子さん、合唱のバス大塚謙太郎君たちです。みんな若かつたですね。

その後、縁がありステージマネージャーとしてお手伝いをさせて頂いたのが、二〇一一年に紀尾井ホール



1月29日 本番前リハーサル時の舞台
合唱団63名、オケ16名、指揮、計80名！

かとう・みつとし

公益財団法人ソルフェージュスクール 評議員

演奏家が素晴らしい演奏をする為には、日頃からの練習という「準備」が絶対に必要です。おかげさまで演奏会は、素晴らしい演奏と聴衆の盛大な温かい拍手で幕を閉じることができました。大変感動的なコンサートでした。しかしその裏で、長い時間を掛けて綿密な「準備」をしてくださった、ソルフェージュスクールの講師陣をはじめ、事務の方々がいることも忘れないで下さい。あの日の感動は、その一人一人の準備に加え「何とかしよう！」というみんなの思いの賜物なのです。



うたでチャレンジ！

私は4歳からソルフェージュスクールに通い始めましたが、初めてのおさらい会は7歳の頃、緊張のみの苦い思い出となっていましたので、今回、陽子先生にうたで出てみませんかとお声をかけていただいた時に、不安や心配の言葉しか頭に浮かびませんでした。しかし今回はピアノではなく新たに「うた」ということでしたので、やってみよう、自分の実力を知るいい機会だと思い直しチャレンジすることになりました。これまで日本語の歌をメインに歌っていましたが、高校生になり音楽選択の授業で出会ったイタリア歌曲を歌い込むうちに自分に合うものが見つかったと感じ、陽子先生のおすすめもいただいたのでイタリア歌曲を歌うことを決めました。本番は気が付いたら終わっていたというくらいに頭が真っ白になりましたが、演奏後に先生方だけでなく初めてお目にかかる方々にもたくさんお褒めの言葉をいただき、驚きとともに感激の気持ちでいっぱいになりました。

後になって陽子先生に、私の声に憧れてくれる小さな生徒さんたちがいるということを教えていただき嬉しかったです。迷いはありましたがおさらい会に出ることができたことは私にとってよい経験となりました。これからもいろいろな歌を歌ってたくさんの人と音楽を通して繋がっていききたいと思います。

ソルフェージュ・声楽生徒 平林瑠子



10月30日(日)



～自分の音に向き合って～

10月30日、秋のおさらい会が行われました。午前中はリハーサル。お辞儀の練習、鍵盤の位置や椅子の高さも確認し、そして演奏。普段リトミックをしているホールですが、お客様用の椅子が並びシーンとしているといつもと違う場所のように感じます。先生からアドバイスをいただきリハーサル終了です。

13時半になると開場です。ご家族やご親戚、出番はないけれどお友達の演奏を聴きにきた方、大勢いらしていただきました。

本番は、連弾あり、器楽の演奏あり、声楽あり、自作の曲を演奏した組もありました。

短時間のリハーサルを、各々の力でより良くなるよう活かし、本番ならではの集中力も発揮しました。

自分が出したい音、作り出したい音楽を懸命に表現する姿は印象的で、聴いている私たちにしっかりと伝わってきました。

ソルフェージュスクール講師 込山今日子



12月18日(日)

クリスマスの集い



絵 年中 森夏実
ソルフェージュ・ピアノ生徒

上から古澤先生・江原先生
春花ちゃん(妹)・夏実ちゃん
ソルフェージュ生徒

リコーダーの

しゅるいがいっぱい!

わたしは、五さいと、二さいのいもうと
といっしょにクリスマスのつどいにいきま
した。

わたしが一ばんびつくりしたのは、リコー
ダーのしゅるいがいっぱいあったことです。
大きいリコーダーや小さいリコーダーが
あって、とくに小さいリコーダーの音いろ
が、たかくてきれいな音でした。

みんなであうたおうのコーナーは「あら
のはてに」がしているうたで、せんせい
といっしょにうたいました。みんなであ

わてんぼうのサンタクロース」をうたっ
て、すずをならしたのが、たのしかつ
たです。さいごのきよくの「きよしこ
のよる」もしているきよくでうれし
かったです。「らいねんもクリスマスの
つどいがあるってほしいな。」とおも
いました。

いもうとをつれて、あとのおちゃか
いにもでられてうれしかったです。お
かしをたべながら、はなしたりでき
たのしかったです。

小学一年生 森千春

ソルフェージュ・ピアノ・ヴァイオリン生徒

♪プチコンサート♪

当日の様子を
ご覧いただけます



ジングルベル

試演会

★ プログラム ★

ショパン

ノクターン No.1 Op.9-1
No.13 Op.48-1

ピアノ独奏 林さち子

モーツァルト

ピアノトリオ 変ホ長調 K.498
『ケーゲルシュタット・トリオ』 1・2 楽章

ヴィオラ 妹尾美紀子

クラリネット 古澤裕治

ピアノ 大村明子

11月27日午後2時、試演会が開か
れました。

演奏後には、水野先生、加藤先生、
吉村先生を交えて、有意義な意見交換
がなされました。

担当：糸井みちよ
ソルフェージュスクール講師

楽しくアンサンブル

12月23日(金・祝)

波立つハーモニー

今回、私は第2バイオリ
ンの下のパートをすること
になりました。上のパート
と勘違いしてしまい、「誰も
第2バイオリンの下のパー
トを弾いていないよ」と言
われ、「あつ」と思いました。
私のパートでした。パート
ごとにわかれていて、自
分の役割が曲を完成させて
いくのにとっても大事になっ
ていくんだなと思いました。
アンサンブルに行く前に
何度か家で練習をしました。
その時は自分のパートだけ
弾いていたので、あまり曲
のイメージがわいていませ
んでした。みんなで合わせ

ていくとすごくハーモニー
がきれいで、曲ができてい
く感じを味わうことができ
ました。私は、第3楽章の
テンポが速くなるところが
すごく心に残っています。
第1バイオリンの上のお姉
さんの弾いているところが
特にテンポが速くなりまし
た。そこに私のパートを合
わせると、音が波立ち、ビ
ブラートをしているような
言葉では表せない響きに変
わりました。弾いていてす
ごく心地がよかったです。
みんなの音が重なり合うと
不思議な響きに変わり、本
当に音楽って楽しい音なん
だなと思いました。

小学四年生 櫻井紗亜弥
(二回目の参加)

パウゼ

ソルフェージュスクールの55回目の年の終わりが近づいています。今年のハイライトは何と言っても1月29日の創立記念演奏会でした。

皆さまのおかげで素晴らしい演奏会となりました。ソルフェージュスクールらしい会だった、心温まる演奏だったと何人もの方から言っていただきました。

関係されたすべての皆さま、ありがとうございました！

伝統と歴史のある東京文化会館の小ホールでの経験は演奏された生徒の皆さんにとっては素晴らしい思い出となることと思います。世界屈指の演奏家による公演の多いホールの担当者にも私たちの演奏を認めていただけたようです。「60周年記念もここですかね。」(もちろん抽選に当たらなければなりません)と言っていただきました。クジ運を願いつつ、次の創立60周年記念演奏会を描きながら普段のソルフェージュスクールでの勉強に更に励みたいと思います。

ソルフェージュスクールは公益財団法人となって5年が経ちました。公益の事業としてより幅広く多くの人に私たちの音楽教育が伝わるようにと新しく「ウフ」、「レ・テタール」のクラスが始まります。「大人のための音楽講座」も続きます。これらのクラスについてより広く多くの方々に伝わりますように皆さまのお力をお借りしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

4月から始まる56年目の新しい年が、ソルフェージュスクールで学ぶ皆様にとって音楽に満され、新しい音楽の魅力を発見できる1年となります様に！

吉村隆子 (公益財団法人ソルフェージュスクール 理事長)

大人のためのいきいき音楽講座Ⅱ

2016年10月～12月

生命(いのち)の歌

地球のリズムを森がメロデーにかえ
生き物たちはそれをハーモナイズさせる。
生命は美しいものだ。そう思っているのは
人間だけではないのだ。

小久保 昌
(大人の講座初参加)

僕は、長い間、ヒトの知性は記憶を文字化(絵文字)する事からスタートしたと考えていました。色と形の方が記憶に留めやすいと思っていたからです。

しかし、ソルフェージュで色と形の基には音があることを知りました。私たちは音楽を通して美しい風景を見ることが出来、又、生きる喜びを感じる事が出来るのです。

音楽について何も知らない僕に先生方が丁寧に教えてくださり大変感謝しております。

五線譜が出来たのはかなり近代に近くなってからで、初期のキリスト教の聖歌は長調ではなく祝詞のような短調風だったろうという話には興味をそそられました。



おしらせ

春の新規生徒募集中！！

4月の予定
4月16日(日) ウフ&レ・テタール
4月29日(土・祝) 春のコンサート

ウフ 日本語：たまご
0歳から未就学児対象の音遊びクラス
月1回10時～11時。※8月はお休み
2017年4月から始まり12月まで、
授業料は無料です。

レ・テタール 日本語：おたまじゃくし
小学1年生から高校生を対象にした合唱団
(日)月1回11時～12時。※8月はお休み
授業料は、¥1,080(税込)＋後援会費¥200(非課税)で、
合計¥1,280/月です。(楽譜代は別)

レ・グルヌイユ 日本語：かえる
高校生以上を対象にした合唱団
(土)月1回10時半～12時。※8月はお休み
授業料は、¥2,780(税込)＋後援会費¥300(非課税)で、
合計¥3,080/月です。(楽譜代は別)

公益財団法人ソルフェージュスクールはみなさまの援助(寄付)により運営されています。引き続きご支援のほどお願い致します。

共に東京藝術大学声楽科出身の大村先生と江原先生。ソルフエージのレッスンに組み込まれる歌の重要性、呼吸することの大切さについて、語っていただいた。

江原 やはり息継ぎとかフレーズ感のために小さい時から歌を歌う必要はありませよね？

大村 声にするっていうことよね。リトミックとかいろんなもので歩いたり身体で体感するっていうことも必要だけど、それにプラスしてね。歌が歌えるようになってくると、初めのうちは、ちっちゃい時はね、途切れちゃうかも知れないけど、段々段々声出してやってくるうちに歌えるようになってくる。それで（ソルフエージスクールは）その子に合わせて歌をやるわけじゃない？だからこの教育って凄く良いなと思うのは、そこなのよね。本当に一人一人「待つ」ってこともするし、どんどん読める子はまた読めるようになるし。

江原 結果は同じだったりますよね。早いか遅いかだけで、待つてさえすれば。

大村 そうすると今度は、楽譜を見た時に、フレーズ、ここまで続けるんだとか、それから歌って高くなるとやっぱり身体の使い方も違うでしょ？だから、それも

音程が上がっていくに従って、自分の身体の使い方っていうのも覚えると思うのよね。だからそれが自然に使えると、凄いい良くなって思ってるの。理屈で（音楽を）作ってるのと、身体から全部呼吸共々で作ってるのと、違うと思うの。

江原 それはかなり違いますよね。楽譜の音をあたまたまに落とし込む時に、やはりそれって暗号解くみたいな理屈じゃないですか。だけどそれを出す時には、理屈じゃなくって身体を通していかなきゃいけない。よく、なんで歌が必要なんですか？って、おっしゃる方も多いですよ。子供に楽器を習わせたいのに、なんでソルフエージ？なんで歌？って。それは身体にちゃんと呼吸を落とし込んでおかないと、音楽を歌うことができないからですよ。やっぱり小さい時に良い呼吸の仕方が、身につくことは大切。

大村 健康にも良いのよ。だけど（最近の演奏家の演奏を）見てるとほとんど呼吸と音楽が別ね。

江原 そうですよ。ソルフエージスクールにいらした青木先生でも指揮者でも、唸ってる方って多かったですよ。唸るってことは息を吐いてるってことですよ。最近の演奏家は息を止めて弾いてる感じの方も多ですよ。それはやっ

ビストロソルフエージ
対談 大村明子先生 × 江原陽子先生
生きた音楽は歌うことから

ぱりどこかで弾く時に緊張して息を止めてしまふけれど、リトミックやソルフエージで何回も歌ってれば、自然にそれが身に付くってことですよ。遊びの中でも絶対的に必要ですよ。

大村 私はそれが無かったら、もう音楽ができないみたいな、本当の音楽にはならないって気がするのよ。それで段々やっければ、高い音になると身体の使い方も違うし、少し静かになつてくれば呼吸も静かになるっていう。

江原 そうなんですよ。ピアノって（低い）ラとドも（高い）ラとドも幅が一緒。ヴァイオリンは高くなると幅が狭くなっちゃう。歌の場合は高い方がもつと大変じゃないですか。だけれど、弾く時にも歌の時の幅を感じた方が良いわけですよ。それはヴァイオリンにしてもチェロにしても管楽器もピアノも同じ。それを自然にある程度の曲からできるようにするためには、リトミックで走ったりとか歌ったりすることがやっぱり大切ですよ。

大村 あと想像力ね。今現実的に機械でなんでもやっちゃうから、その何て言うの、身体にあたる風の感覚とか、お日様がバーツと照つてたり、雨になってびしゃびしゃになったりとか、そういうのを通り越しちゃうのよ。感じないと。だから

ら感受性も凄く大事だと思うのよ。それでまあ、すごく感受性の豊かな人もいれば、感じにくい人だっているけれども、時間かければね、できなくないのよ。音楽的にどういう風に把握していくかっていうことを、今忘れがちなんだけど。それは私やっぱり命があるってことが凄く大切だと思うの。あつてこそでしょう。

★ 編集後記 ★

記事やイラストをお寄せいただきました皆様、ありがとうございます。いろいろな方にかいていただきましたので多様な切り口で面白い新聞になったと思います。

編集 今村・田中・和栗



大村明子先生
ソルフエージスクール講師



江原陽子先生
ソルフエージスクール講師
洗足学園音楽大学准教授